前田京美著・山岸常人監修
『日輪兵舎 戦時下に花咲いた特異な建築』(鹿島出版会)の
歴史的記述における誤謬について

松山　薫

東北公益文科大学総合研究論集第37号 抜刷

2020年1月20日発行

書評

前田京美著・山岸常人監修『日輪兵舎 戦時下に花咲いた特異な建築』(鹿島出版会)の歴史的記述における誤謬について

松山　薫

日輪兵舎とは，1938年に本格的に始動した満蒙開拓青少年義勇軍制度によって，茨城県に開設された満蒙開拓青少年義勇軍訓練所（通称内原訓練所 所長：加藤完治）に建てられた，円形平面と円錐形の屋根を持つ訓練生の宿舎兼教室である。義勇軍体験者の回想記などには頻出し，内原のそれを模した建築が各地に建てられたことを示唆する文献もわずかにあったが，戦後はほぼ忘れられた存在であった。評者は偶然2002年に内原以外の現存日輪兵舎に出会ったことにより，歴史地理学の立場から，日輪兵舎の研究を継続しているが，実は建築学の分野ではこの建築の存在はほとんど等閑視されてきた。

そうしたなかで，前田京美氏が2015年に京都大学大学院工学研究科に提出した修士論文「日輪兵舎に関する建築的研究」に基づく書籍が，2019年に掲題のように出版された。実は評者は人づてにこの修士論文を拝読する機会をややあってから得ていた。本書のあとがきにもあるように，「修士二年の夏」に同期より遅れて決めたというテーマを，おそらく半年足らずでまとめあげた「力技」には驚くばかりであった。建築の分野では，随想等を除けば日輪兵舎研究は皆無であったので，むしろ出現が遅すぎたくらいだと思った。それと同時に，私には評価能力のない建築学的な記述以外の，歴史的記述についての瑕疵の多さや，学術論文としての引用表記の不備も目に付いた。

今回，「修士論文は文章も生硬で冗長なこともあって，そのままで読者の目に触れるのは憚られたので，構成も含めて全体の修正作業を行」ったという監修者の言葉が末尾にある。さすがに見るからに他の文献の丸写しだったところなどは削られていたり，自分で言うのも僭越だが分野は違えど唯一のアカデミックな立場からの日輪兵舎の先行研究者である評者の名前が最初から最後まで間違っていた，などという点は修正されていたが，一読して本質的な違和感は

やはり拭えなかった。その違和感とは，「この書籍は学術書として読むべきものなのか？それとも一般書として読むべきものなのか？」というものである。学会発表や学術誌への発表といった，学問的な場での検討を経ないままでの書籍化であることがその理由かといえば，それだけの問題でもなかったと思われる。というのも，当該修士論文が，日本建築学会優秀修士論文中の1編に選ばれたということからもわかるように，建築系の学会でこの内容を発表したところで，以下に示すような歴史的分析手順の甘さに関して審査能力のある研究者の目に触れる保証はないからである。形式としてはむしろ頻繁に一次資料を含む注記があり，一見すると学術書のような体裁を採ってはいる。しかし，二次資料や先行研究に関しては引用表記が恣意的といえるほど不充分で，また議論が先走り根拠の示されない推測が多用されている点は，基本的に修士論文とさほど変わっていない。加えて広島を九州といったり，新郷村を神郷村とするなどのケアレスミスも多いが，本稿ではより本質的な問題に焦点を絞りたい。

例えば，第一章の満蒙開拓青少年義勇軍の概要に関して，先行文献が適切な位置に引用されていない。また，そもそも日輪兵舎を最初に学術研究の俎上に載せたのは評者であるが，その点には触れず「研究途上」などとのみ評している。さらに，第一章，第二章の考案者古賀弘人と建築主任渡辺亀一郎についての記述は，『満州開拓と青少年義勇軍－創設と訓練－』（内原訓練所史跡保存会事務局，1998）にすでに大筋で書かれているものに，いくつかの裏取りをして肉付けしたものである。同書とほぼ同一の内容の節もいくつかある。一般書であれば，煩雑さを避けるためにある程度の引用表記の省略もありうるが，いずれにせよ本書の書き方では，章の骨格そのものが前田氏の着想であるかのようにしか読めず，一般書だとしても妥当ではない。そもそも「序」に「日輪兵舎は，従来，渡辺亀一郎の考案になるものとされてきた」とあるが，そう思ってきたのは建築学者だけである（松山，2016a）。また，日輪兵舎の名称の由来に関する記述もすでに松山（2004）にあり，新規性はないが，引用表記等は一切ない。

第二に，内原から各地に伝播していった日輪兵舎についての疑問がある。第四章には「日本各地の日輪兵舎」と題する節がある。各地の様々な主体が内原を模して建てた日輪兵舎について俯瞰的に探求することは，青少年の国策移民

という特異な政策が全国に波及していった過程を知るうえで，非常に重要な課題である。そもそも評者が2002年に日輪兵舎の研究を始めたときは，各地に伝播した日輪兵舎について最も多く言及した既存文献でもわずか6か所を挙げるのみであった。しかし，戦前の満州開拓関係の雑誌，新聞記事，戦後の関連文献の探索，またインターネット上での検索などを継続的に行った結果，松山（2004）の時点では18都府県計29か所を把握し，2009年には27都道府県62か所と増えていった。その後も多くの文献に触れるうちに，日輪兵舎がさまざまな異称で呼ばれていたことを把握して検索ワードを増やしたことや，新聞・雑誌記事のデジタルデータベース化の進展もあいまって，松山（2015）では32都道府県84か所，そして現在では42都道府県97か所と増え続け，ほぼ全国的な分布を掌握するに至っている。

翻って，この書籍の一覧表にあげられているのは35（～38）か所（3校の小学校のうち少なくとも1校に存在したなどという曖昧なものも含んでいる）のみである（なお，その分布図に階級区分図を用いているのは地図表現法として適切ではない）。そのほとんどは最も基本的な同時代文献である雑誌『開け満蒙』（およびその後続誌の『新満洲』『開拓』，満州移住協会発行）に掲載されているもので，残りの若干例は前田氏が修士論文執筆時頃にインターネット上に登場していた事例および現存事例調査時に知り得た同県内の事例と見なし得る。その時に手元にある材料で論じる，というのは一つの方法かもしれない。しかし，前田氏が修士論文に取り組み始めた時点で，すでに評者はそれよりはるかに多い事例を把握していることを公表していたにもかかわらず，自分が最も簡便な方法で把握できたものだけを元に立論するのは，果たして学問的に正しい姿勢であろうか。日輪兵舎という特異な建築は，建設当時から写真に残されることも多く，評者は現在把握している97か所のうち54か所の写真，2か所の模型，2か所の建造時の図面の存在を確認している。一方，前田氏が一覧表ではなく具体的に記述しているのは「写真や資料の見出せた一四か所」と現存4棟のみである。このわずかな例から，「ほかにない特有な形態」などという特徴を断ずることに意味があるだろうか。修士論文執筆という極めて時限性の強い論文作成であるならともかく，書籍化の過程においても，評者は前田氏の把握していない数多くの日輪兵舎の事例についての照会を受けたようなこと

はない。結果として，書籍の帯にあるように「戦争遺産の全貌に迫る」といったような内容には成り得ていない（帯の惹句は出版社側の発案かもしれないが）。

日輪兵舎は，戦時中の限られた一時期だけに出現した建築であるため，その歴史的側面に関する分析は建築の存在の本質そのものにかかわる。ところが，その点においても，本書では歴史的研究に不可欠な史料批判が適切に行われていないため，資料的な裏付けによる吟味が必要な伝聞などを無批判に採用している箇所がみられる。さらに，それらの内容が，適切な引用表示なくあたかも自らの考察であるかのような筆致と化してしまっている部分も複数存在する。ここでは，山形県遊佐町に現存する「日輪講堂」に絞って問題点を指摘したい。「日輪講堂」については，現存4棟の一つということで，本書でもかなりの紙幅を割いているが，ここにはとりわけ大きな問題が存在している。

遊佐町の「日輪講堂」は，石原莞爾という歴史上著名な軍人が直接かかわっている。当然，かなりの数の一次資料の存在が想定しうる。「日輪講堂」は，石原の指導する東亜連盟の農場として開設された西山農場の一施設として建てられ，数度の移転を経て現存している。ところが前田氏は，石原莞爾についても東亜連盟についてもほとんど何も調べていないことが，文章の内容から明らかである。まず，冒頭に西山農場は「戦後の昭和二一年一〇月中旬，石原莞爾が（中略）西山に入植したことにはじまる。」とあるが，そもそもここから誤りである。西山農場の開設は1943年であり（松山，2007），東亜連盟関係の一次資料によれば，同年3月に鍬入れ式を行ったと書かれている。そして，日輪兵舎（建設当時は本来のこの名でよばれていた）は，前田氏は1946年に内原訓練所の古材等を用いて建設されたとするが，実際は1944年に建てられている。このことは，『東亜連盟』記事や石原莞爾の書簡（鶴岡市立図書館蔵）からもほぼ確定的である（松山，2016b・c，2018）。年代の間違いは本書には他にもあるが，この戦前と戦後の齟齬は重大である。

それでは，本書の当該部分の記述は何に基づいているのか。実はその内容は，ほとんど中條（1996）と同一である。中條立一氏は，かつて西山農場に若くして入植した人で，『石原莞爾　永久平和の使徒』の中に，「日輪講堂」について署名入りの一人称で寄稿しているので，本書のように「『永久平和の使徒』で

は」という漠然とした表記ではなく，中條氏の独立した文献として引用すべきであろう。このような部分に神経を払っていないことが，以下のような史料批判不在へ直結している。すなわち，中條氏自身は旧制中学を卒業後，戦後になってから西山農場に入植しており（これは他の石原研究書籍にも記載されている），戦前の状況を知悉する立場にないと考えられるのである。したがって，中條氏が「昭和二一年五月ごろ」古材を「組み建て上げた」と記しているのは，何らかの理由で1944年に建てた場所から当初の移転をした時の記憶と考えるのが妥当である。

加えて言うならば，引用表記の不適切さも目立つ。「日輪講堂」の「沿革」の部分は，2ページに渡り，ほぼ中條（1996）の要約に過ぎない。しかし，中條（文中には『永久平和の使徒』と表記）が言及したとされている部分は「使用された部材は内原訓練所から運び込まれた」の一文のみである。それ以降の経緯に関しては前田氏の地の文として記述されているものの，ほとんど中條（1996）に依拠しており，不適切な引用方法である。

評者が再三述べているように（松山，2004ほか），日輪兵舎とは，戦前の満州開拓の象徴であり，大陸進出の企図と皇国思想の体現そのものである。そのようなものが，終戦直後の1946年に，GHQ占領下の日本において，なおかつGHQの注視のもとにある石原莞爾のお膝元で「新築」されうるのか。この点への疑義に，仮にもこの建物を「研究」しているのであれば気づいて然るべきである。これでは，日輪兵舎の本質を見誤っているといわれてもいたしかたない。

内原訓練所が1945年に閉所した後，解体された日輪兵舎の木材は，復興住宅等に転用されたが，これほど遠方に運んだなどという資料は，長年研究してきた評者も見たことがない。もちろん前田氏もこの点に関して何の根拠も示していない。石原と加藤の関係をその推測の理由としているが，加藤完治と関係の濃い人物（いわゆる加藤グループ）がかかわる農場等は当時全国にあった。また，そもそも材料の松や杉は周辺にいくらでもあり，遠路はるばる内原から運ぶ積極的理由はない。加えて，「日輪講堂」内に掲げられている棟梁の写真の額縁に「昭和一九年建設当時の棟梁」と書かれていることに対しても，中條（1996）の記述に引きずられて，昭和29年の誤記と認識したのであろうか。いずれにしても，こうしていくつものヒントを見逃し，恣意的に解釈し，文献調

査を省略した末に，建造年は1946年と言い切っているのである。

そもそも中條（1996）では「私の記憶する日輪講堂は」と断ったうえで，「昭和二一年五月ごろ，当時すでに解体されて西山に運び込まれていた古材を，近在（主に高瀬村）の青年団と一緒に西山農場の松林の一角を切り開いて組み建てあげたのが，西山での最初の歩みであったと思う。」「このことから西山以前は，加藤完治氏の経営する茨城県の内原訓練所にあったのではないかと推測される。」というふうに，必ずしも断定的には書いていない。そして戦後に公刊された書籍の中で，日輪講堂の建築年を推定とはいえ明記した書籍はこれだけなので，実際この記述はいくつかの石原研究書にも引かれている。しかしながら，前田氏の本書は，日輪兵舎そのものをテーマとして扱ったものである。その中で，十分な一次資料の渉猟も史料批判も行わず，「建築されたのが戦後であるので，内原訓練所などの古材を再利用」と断定するに至るのである。驚くべき飛躍である。

また，1954年の移転後の写真を引用しているが，そこに施された増改築には全く触れておらず，移転・増改築の事実そのものに気づいていないようである。

折しも，これまで「石原莞爾顕彰会」により管理・清掃はされていたものの，遊佐町からはほぼ放置されていて，老朽化なら解体もやむなしとされていた「日輪講堂」に対して，最近町が保存へと舵を切り（評者の拙文［松山，2016c，2017］がきっかけとは町担当者の談），調査を進めている。そうした時期に，このような内容の書籍が，建築分野では著名な鹿島出版会から，京都大学名誉教授の監修のもとで発行されたことによって，誤った内容が社会に流布することを危惧する。

建築学の分野における当該テーマのプライオリティを急いだのかもしれないが，この「日輪講堂」の部分に象徴されるように，歴史的な建築を扱うにしては，史的側面の掘り下げの粗略さ，稚拙さは否めず，結果として拙速の印象は免れ得ない。「監修者あとがき」にあるような「記憶が正確であるとは限らず，したがって正確な史料批判がかなわない部分も少なくない。」という言辞は，この時代の研究でしばしば目にするが，本書の誤謬はそれ以前のレベルである。人間の記憶の特性を織り込んだ上で，それをできる限り吟味し採用するか留保

するかを決めるのが研究者の役目である。逆に，あくまで日輪兵舎の現存棟や図面，写真等から確実に判断できうる範囲の建築学的特徴を扱うことに内容をとどめておけば，ここまで大きく本書の価値を減ずることはなかったであろう。

日輪兵舎については，戦前は岸田日出刀，戦後は藤森照信によって，これを生み出した制度自体の原資料を参照しなかったことにより，考案者が誤り伝えられてきたことは松山（2016）が指摘したとおりである。本書はその意味では，建築関係者によって描かれた日輪兵舎に関する言説として，ある意味で同じ轍を踏んでいるといえよう。

前田氏の日輪兵舎への強い思いは，似たような思いを持ちながら17年間日輪兵舎に向き合ってきた評者にはよく理解できる。日輪兵舎とは，歴史的には重大な結果を引き起こした満州移民を推進した象徴的な装置（松山，2004）であった。そこに起居した人々の回想の中の日輪兵舎は，青春の舞台だったと言う人から思い出したくもないと忌避する人までさまざまで，実に複雑な，一筋縄ではいかない存在である。それにもかかわらず，建物自体の特異なフォルムは魅惑的とさえいえる。私に前田氏の修士論文を紹介してくれた，彼女のインフォーマントの一人は，当該論文のことを「書き手の思い入れが強すぎる」と言っていた。私はさらにそれに加えて，思い入れが強すぎて他人の言説と自分の考えとが渾然一体となった文体になってしまっていることを指摘したい。

また，「監修者あとがき」にあるように，日輪兵舎を「ナチの収容所と同じように，平和を追求する手がかりとなる存在として認識する必要があるだろう。」との評価も，戦前・戦後とかかわった人々の存在があって現存している「日輪講堂」のような具体的事例をみていくと，そのように単純に「ナチの収容所」になぞらえられるものではないことも付記しておく。

この本では結論に至ってもなお，「日輪講堂」の建設年として「1946年」が出てくる。最後までこの誤謬が繰り返されているのを見るにつけ，修士論文提出から書籍化するまでの間に，一次資料や先行文献を注意深く研究し，日輪兵舎の本質を正確に見極めてほしかったと思わざるを得ない。やはり「半年でまとめた修論」の域を出ていないというのが正直な印象である。

引用文献：

内原訓練所史跡保存会事務局（1998）：『満州開拓と青少年義勇軍－創設と訓練－』内原訓練所史跡保存会.

中條立一（1996）：物言わぬ証人－日輪講堂．武田邦太郎・菅原一彪編著『石原莞爾　永久平和の使途』冬青社，230-233.

松山　薫（2004）：満蒙開拓の痕跡をたずねて－山形県にあった「日輪兵舎」〔序章〕－．東北公益文科大学総合研究論集，8，75-90.

松山　薫（2005）：満蒙開拓運動と各地の「日輪兵舎」（発表要旨）．日本地理学会発表要旨集，67，164.

松山　薫（2007）：日輪舎.（シリーズ 歴史を語る建物たち⑤）Future SIGHT（荘銀総合研究所），36，8-9.

松山　薫（2015）：日本各地の日輪兵舎－忘れられた満蒙開拓青少年義勇軍の象徴－．季刊地理学，67，191-195.

松山　薫（2016a）：日輪兵舎の創案者に関する考察（一）．東北公益文科大学総合研究論集，31，65-71.

松山　薫（2016b）：石原莞爾と「日輪講堂」－満州から庄内砂丘へ－（発表要旨）．季刊地理学，68(3)，221-222.

松山　薫（2016c）：建物の歴史的価値の発掘とその保全に関する研究－「日輪講堂」を事例に－（発表要旨）.『第2回　地域課題全国フォーラムin庄内』東北公益文科大学　地（知）の拠点整備事業　庄内オフィス，35.

松山　薫（2017）：建物の歴史的価値の発掘とその保全に関する研究－「日輪講堂」を事例に－（発表要旨）.『第3回　地域課題全国フォーラムin庄内』東北公益文科大学　地（知）の拠点整備事業　庄内オフィス，46.

松山　薫（2018）：『山形県飽海郡遊佐町に現存する「日輪講堂」に関する学術調査報告』東北公益文科大学松山研究室.